

福島県伊達市方言

白岩 広行

項目		基本情報
話者 情報	生年	1982年
	生育地	福島県伊達市（旧保原町）
	性別	男性
	補足情報	話者は伊達市生まれ。両親とも伊達市出身。18歳まで福島県中通り地方で生育（0-5歳：福島市、5-7歳：伊達市、7-12歳：郡山市、12-14歳：白河市、14-18歳：福島市）。隣の福島市での居住年数が長い。主に伊達市出身の祖父母や両親から方言を習得したので伊達市方言として報告する。
解説	概要	<p>福島県の方言区画に定説のようなものはないが、方言文法研究会の区画図では中通り北部方言にあたる。話者の主な生育地は伊達市と福島市にまたがるが、両市はひとつの生活圏をなしており、方言的特徴の大きな差異は感じられない。</p> <p>この話者の世代では、同世代どうしで話す場合、かなり標準語に近い言語使用がなされる。しかし、使用場面に限られるだけで、高齢者と同様の方言を理解したり使用したりできる話者は多い。この話者も、高齢者と話す場面や独り言では、高齢者の方言に近い言語使用をすることがある。</p> <p>今回は、話者の両親（1950年代前半生まれ）の世代の方言をイメージして方言訳をおこなった。話者自身も、高齢者と話す場面ではこのような方言を使用することがある。話者の祖父母（1920年代生まれ）の世代で使われる表現も備考欄に記す。</p>
	表記	ガ行鼻音は「カ°、キ°、ク°、ケ°、コ°」のように半濁点を使って示した。子音が有声化したカ行、タ行音は「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」「ダ、ジ、ズ、デ、ド」のように濁音のカナで示した。伝統的にはズーズー弁としての特徴を持つ方言だが、今回報告する話者の親世代では、シとス、チとツ、ジとズ、イとエの音は標準語と同様に区別される。その区別を表記にも反映している。
	文法概説	<ul style="list-style-type: none"> ・主格助詞はカ°だが、主格名詞句に文の焦点がない場合は無助詞になりやすい。 ・有生物の対格名詞句はントゴで示される。無生物の対格名詞句は基本的に無助詞になる。 ・与格助詞はサで、移動の着点や目的もサで示される。時間や受身文の動作主は標準語と同じくニで示される。 ・主題助詞はワだが、主題が無助詞になることも多い。 ・準体助詞としてカ°ン、カ°ナを使う。 ・受身表現、可能表現としては（ラ）レルを使う。（ラ）レルの過去形は（ラ）ツチャ、否定形は（ラ）ンニになる。四段動詞の肯定の場合には、可能表現として可能動詞も使う。 ・過去表現としてはタ、タッタを使う。タッタは、過去のできごとを現在から切り離して述べる場合にのみ使われ、そのできごとの直後などの場合には使われない。 ・推量表現、意志・勧誘表現としてはベを使う。 ・仮定表現としてはダラ、ゴッタを使う。

〔基本例文50〕 福島県伊達市方言訳

方言訳1 (もっともよく使う表現)	方言訳2 (使うこともある表現)	備考・コメント
1 イマガラ トモダチサ テカ° ミ カグ。		カグはカクになることもある。
2 フデデ テカ° ミ カグ ヒトモ イル。		カグはカクになることもある。
3 イエサ カエツテ スク° ニ テカ° ミ カイダ。	イエサ カエツテ スク° ニ テカ° ミ カイダツタ。	話者の祖父母世代では、イエが摩擦性の雑音を帯びてジーになり、カエツテはケーツテと言う。カイダツタは、書いた行為を現在から切り離して回想する場合にのみ使われる。書いた直後で手紙が目の前にある場合などにはカイダツタは使えない。
4 カイダ テカ° ミ ナンドモ ヨミガエス。		ヨミガエスはヨミカエスになることもある。
5 ヨルワ ジュージン ナツタラ サツサドネロ。		
6 アブネーガラ シャドー アルグナ。	アブネーガラ シャドー アルガンナ。	アルガンナはアルグナよりやわらかい表現。
7 コノ ホン タローサ ヤツペ。	コノ ホン タローサ クレツペ。	
8 ヒルガラ アメ フツペ。		
9 ハルン ナット ハナ サグ。	ハルン ナツタラ ハナ サグ。	「なれば」については、標準語と同じくナレバと言うこともある。サグはサクになることもある。
10 ハナコ マド アゲダツケ ムシ ハイッテキタ。	ハナコ マド アゲダラ ムシ ハイッテ キタ。	アゲダツケはアゲダツケカ° とも言う。入ってきた虫がすでにいなかった場合など、現在から切り離して回想する場合はハイッテ キタツタも使える。
11 アサ アンマシ テレビ ミネー。		
12 ハナコ ホダ バング° ミナンテ ミネー。		ミワ シネーと言えないこともないが、標準語的に感じられる。
13 ハナコ キノー テレビ ミネガッタ。		話者の祖父母世代では、キノーはチンニョーと言う。
14 ハナコ テレビ ミネーデ ホンバッカ ヨンデル。	ハナコ テレビ ミネーデ ホンバリ ヨンデル。	
15 テレビ ミネガッタラ コノ シコ° ドキョージューニ オワツタベ。	テレビ ミネード コノ シコ° ドキョージューニ オワツタベニ。	ミネードは、文末がオワツタベではやや不自然さを感じるが、オワツタベニ(標準語「終わっただろうに」相当)だと適格。話者の祖父母世代ではキョーはチョーと言う。
16 ネズ ダシタ コサ クスリ ノマセダ。	ネズ ダシタ コサ クスリ ノマセダツタ。	ノマセダツタは、昔の思い出を語るときなど、飲ませた行為を現在から切り離して回想する場合にのみ使われる。飲ませた直後で子どもの様子を見ている場合などにはノマセダツタは使えない。
17 カーチャン イモードンドゴ オツカイサイカ° セダ。	カーチャン イモードンドゴ オツカイサ イカ° セダツタ。	イモードニ、イモードサは不適格ではないが、あまり使わないと感じられる。イモードオは標準語的に感じられる。イカ° セダツタは、昔の思い出を語るときなど、行かせた行為を現在から切り離して回想する場合にのみ使われる。行かせた直後で妹の帰りを待っている場合などにはイカ° セダツタは使えない。

18	オドードド ケンカシテ オレダゲ トー チャンニ オゴラッチャ。	オドードド ケンカシテ オレダゲ トーチャンニ オゴラレダッタ。	話者の祖父母世代では、オドードはシャ デという。オゴラレダッタは、昔の思い 出を語るときなど、怒られたことを現在 から切り離して回想する場合にのみ使わ れる。怒られた直後で泣いている場合な どにはオゴラレダッタは使えない。
19	ルスノ アイダニ ドロポーニ ハイラッ チャ。	ルスノ アイダニ ドロポーニ ハ イラレダッタ。	ハイラレダッタは、昔の思い出を語ると きなど、泥棒に入られたことを現在から 切り離して回想する場合にのみ使われ る。泥棒に入られた直後であらうたえて いる場合などにはハイラレダッタは使えな い。
20	コノ コー マダ チャッコイゲント ムズ ガシー カンジ カゲル。	コノ コー マダ チャッコイゲン ト ムズガシー カンジ カガレ ル。	話者の祖父母世代では、チャッコイゲン トはチャッコイゲンチョオと言う。
21	キョーワ ジガン アッカラ ユックリ テ カ° ミ カゲル。	キョーワ ジガン アッカラ ユッ クリ テカ° ミ カゲル。	ジガンはジカンになることもある。話者 の祖父母世代ではキョーワはチョーフと 言う。
22	コノ コー マダ チャッコイガラ ヒラ カ° ナシカ カガンニ。	コノ コー マダ チャッコイガラ ヒラカ° ナッキリ カガンニ。	ヒラカ° ナシカはヒラカ° ナツッカとも 言う。話者の祖父母世代では、ヒラカ° ナッキリはヒラカ° ナツチリと言う。
23	ツグエ ネーガラ ジー チャント カガン ニ。		
24	タロー イマ トナリノ ヘヤデ ホン ヨ ンデル。		
25	タロー ハナコニ カリダ ホン モー サ イコ° マデ ヨンデル。	タロー ハナコガラ カリダ ホン モー サイコ° マデ ヨンデル。	
26	モット シズガナ ドゴデ ネデー。		話者の祖父母世代では、モットはイマッ トと言う。
27	ユーヤゲデ ソラ アゲー。		
28	コドモノ コロ ヒトンジ ベンジョサ イ ク° ノ ウント オッカネガッタ。		
29	ウドンダノ ソバダラ ヤスイベ。	ウドンダノ ソバダゴッタ ヤスイ ベ。	
30	フルホンヤニ ホン タガグ カイドッテ モラッタ。	フルホンヤニ ホン タガグ カイ ドッテ ケラッチャ。	タガグはタガク、カイドッテはカイトッ テになることもある。ケラッチャは動詞 クレルの受身の過去形（標準語に直訳す ると「くれられた」）。
31	テンキ ワリクテ ダレモ コネー。		話者の祖父母世代では、テンキはテンチ と言う。
32	モット ヤスイド カエダッタノニ。	モット ヤスイド カエダノニ。	話者の祖父母世代では、モットはイマッ ト、カエダノニはカワッチャノニとも 言う。
33	ヒトンジ アソビサ イッタッテ タノシ グネー。		タノシグはタノシクになることもある。
34	テンキ ヨグ ナットセー デガゲラレル。	テンキサエ ヨグ ナット デガゲ ラレル。	ナットセーのセーは標準語の「さえ」に 相当する（ナットセーを標準語に直訳す ると「なるとさえ」）。話者の祖父母世 代では、テンキはテンチと言う。
35	タロー マダ チューカ° グセーダ。		

36	コドモン トギ センエンダッテ タイキンダッタ。	コドモン トギ センエンダッテ タイキンダッケ。	話者の祖父母世代では、タイキンはタイチンと言う。
37	コイズ ドロボーノ アシアドダベ。		
38	ソイズワ オレノ カサデ アイズワ センセーノ カサダ。		話者の祖父母世代では、ソイズはホイズと言う。
39	モシ アシタ イー テンキダラ コドモラ ツレデ ドッカサ インペ。	モシ アシタ イー テンキダゴツタ コドモラ ツレデ ドッカサ インペ。	話者の祖父母世代では、ツレデはセデと言う。
40	コノ カサド クズワ オレノデ ネー。	コノ カサド クズワ オレノ カンデ ネー。	オレノ カンデはオレノ カナデとも言う。話者の祖父母世代では、オレカンデとも言う。
41	A: アシタモ コゴサ クッカ? B: ウン クッカド オモッテル。	A: アシタモ コゴサ クッカイ? B: ウン クッパド オモッテルヨ。	クッカイはクッカより丁寧。終助詞ヨと似た伝達の意味は、ヨがなくとも、文末の上昇イントネーションで表すことができる。
42	A: ナンデ コネーノ? クルツツッテダベシタ。 B: ワリー。 チット カラダノ グアイワリーナダ。		ベシタはビシタとも言う。話者の祖父母世代では、ナンデはナシテと言う。
43	A: アスクサ インノ タローガ? B: イヤ タローデ ネクテ ジローデネーガ?	A: アスクサ インノ タローガイ? B: イヤ タローデ ネクテ ジローデネーガナ。	タローガイはタローガより丁寧。
44	A: ドイズカ° オメーノ カサダ? B: コイズカ° オレノ カサダ。	A: ドイズカ° アンタノ カサダイ? Bの返答は方言訳1に同じ。	話者の親世代では、男性はオレ、女性は標準語形のワタンを使うことが多い。話者の祖父母世代では男女ともオレを一人称代名詞として使う。アンタはオメーより丁寧。話者の曾祖母(1906年生まれ)は二人称代名詞にニシャを使った。実際の会話では、二人称代名詞ではなく名前などで相手と呼ぶことが多い。カサダイはカサダより丁寧。終助詞ヨと似た伝達の意味は、ヨがなくとも、文末の上昇イントネーションで表すことができる。
45	A: コノ ホン ヨムゴッタ カシテ ヤッツオ。 B: ソノ ホンダラ モー ヨンチマッタ。		ヤッツオは標準語「やるぞ」相当。
46	A: トナリノ イエサ ドロボー ハイッタ ンダスケ。 B: エ ソーナノ。 トナリサ ハイッタンダゴッタ ウジモ キー ツケネッカ ナンネナ。	A: トナリノ イエサ ドロボー ハイッタンダスケヨ。 B: エ ソーナノ。 トナリサ ハイッタンダラ ウジモ キー ツケネッカ ナンネナイ。	ナンネナイはナンネナより丁寧。ハイッタンダゴッタとハイッタンダラに丁寧さの差はない。話者の祖父母世代では、イエはエないし摩擦性の雑音を帯びてジー、ハイッタはヘーッタ、トナリサはトナッシャ、ウジはオラエ、キーはチーと言う。
47	A: アメ フリソーダガラ マド シメドイデ ケロ。 B: モー シメダヨ。	A: アメ フリソーダガラ マド シメドイデ クンニガイ? B: モー シメデ アルヨ。	クンニガイ(標準語「くれないかい」相当)はケロより丁寧。シメデ アルヨはやや標準語的に感じられる。
48	A: ソバ クイサ インペ。 B: ソバヨリ ウドンノホー イーナ。		話者の祖父母世代ではイーは摩擦性の雑音を帯びてジーと言う。

49	<p>A: イロハシヨテンツツー ホンヤ ドゴサ アッカ シンニガ?</p> <p>B: シッテル。 ムゴーサ カンバン ミ エッペ?</p>	<p>A: イロハシヨテンツツー ホンヤ ドゴサ アッカ シンニガイ?</p> <p>B: シッテル。 ムゴーサ カンバ ン ミエネガイ?</p>	<p>シンニガイ (標準語「知らないかい」相 当) はシンニガより丁寧。ミエネガイ (標準語「見えないかい」相当) はミ エッペより丁寧。</p>
50	<p>A: タマヨーカンッテ クッタ ゴド アッ カ?</p> <p>B: ウン アレ ホントニ ンメーヨナ。</p>	<p>A: タマヨーカンッテ クッタ ゴ ド アッカイ?</p> <p>B: ウン アレ ホントニ ンメー ヨナイ。</p>	<p>アッカイはアッカより丁寧。ンメーヨナ イはンメーヨナより丁寧。なお、伊達市 周辺の名物には、あんぼ柿、ラジウム玉 子、むぎせんべいなどがあるが、これら は食べたことがあって当然であり、尋ね る場面が想定しにくいいため、やや離れた 二本松市の名物である玉ようかんを例に した。</p>